

## 定例研究会要旨

日時：平成 28 (2016) 年 6 月 1 日 16:00～20:00

会場：東京外国語大学 語学研究所

「移動表現の日独比較 —移動動詞と経路を表す前置詞句との共起関係を中心に—」

発表者：高橋美穂（東京外国語大学大学院総合国際学研究院特別研究員 / ドイツ語学）

本発表では、類型論的に異なるタイプに属するとされる日独語の移動表現を、とりわけ移動動詞と経路表現との結びつきという観点から分析するための基礎的なデータを示し、比較・対照分析のための枠組みを示すことを目指した。本発表の構成は次のとおりである。まず、本発表の目的・分析対象を述べたあと (1.)、移動表現・移動動詞のタイポロジーを取り上げた (2.)。続いてドイツ語の移動動詞を例に、移動の経路を表す前置詞句によってもたらされる、移動事象のアスペクト的・相的な変化に言及した (3.)。さらに、起点・着点・中間経路などの具体的な経路を表す前置詞句が、ドイツ語の移動動詞が用いられる特定の構文において、構文の可否や解釈と密接に関連することを示した (4.)。そのうえで、日本語における移動動詞と経路表現の組み合わせを、とくに移動事象のアスペクト的・相的な変化に着目し、確認した (5.)。以上を受けて、最後に、日独語では移動事象の相的な変化がそれぞれ異なる形式で言語化されることを指摘した (6.)。

移動事象のアスペクト的解釈の変化は、移動経路の有界性と関連している。ドイツの *laufen* (走る) や *schwimmen* (泳ぐ) のような移動様態を表す動詞は、元来段階的な位置変化を表す「過程」タイプのものであるが、これらの移動様態動詞は、有界的な経路を示す起点や着点を表す前置詞句を伴うことで、相反する位置づけの状態から構成される「状態変化」タイプへと変わる。ドイツ語では、このような経路を表す前置詞句の有無が、移動動詞が出現する構文の可否や構文全体の解釈に関わることがあり、その一例が自由与格を伴う構文 (自由与格構文) である。高橋 (2015) におけるコーパスを使用した事例の調査・分析の結果、移動動詞が出現する与格構文では、(i) 起点・着点・中間経路などの具体的な経路を表す前置詞句が必須であり、アスペクト的に区切られた移動事象が表される必要があること、(ii) さらにそれらの経路を表す前置詞句を手がかりとして「与格の人のもとへ」という求心的移動あるいは「与格の人から離れて」という遠心的移動のいずれかが表され得ること、(iii) そのような移動の直示性と構文全体の解釈（「影響」か「非意図的使役」か）が関連していること、が明らかとなった (自由与格構文の異なる 2 つの解釈については、McIntyre (2006), Schäfer (2008) など参照)。このように Talmy (1991, 2000) によるところの「付随要素枠付け言語」タイプであるドイツ語では、具体的な移動経路は前置詞句によって表され、しかも、それらが文で表される移動事象のアスペクト・直示性に密接に関わる。その一方で、「動詞枠付け言語」タイプの日本語では、移動経路は動詞に語彙化さ

れる傾向があるとされる（宮島 (1984)、松本 (1997)など。「入る」「出る」「着く」などの移動動詞では特定の経路（「入る」「着く」では着点、「出る」では起点）が語彙化されており、これらの動詞によって表される移動は時間的・アスペクト的に区切られたものとなる。日本語においても「走る」「歩く」「はう」などの移動様態を表す動詞が存在するものの、これらの動詞で表されるのは時間的・アスペクト的に区切られない移動であり、しかも、これらの動詞と移動経路を表す格助詞との共起には一定の制限が認められる。

本発表の結論は次のとおりにまとめられる。(i) ドイツ語の経路を表す前置詞句は、移動様態動詞と結びつくことで、移動の事象タイプを「過程」から「状態変化」へと変える役割を担う。同様の働きを持つのは、日本語では「入る」「出る」「着く」のような経路を語彙化した移動動詞である。これらの移動動詞は、相反する下位事象から構成される変化を表すものとして分析される（例えば「部屋に入る」の場合、「部屋にいない」という状態から「部屋にいる」という状態への変化）。(ii) 日本語の移動経路を表す「に」格や「を」格は、(ドイツ語の経路を表す前置詞句と異なり) 移動事象の相的变化には関与しない。これらの助詞は、動詞の語彙意味に内在する経路の概念をそれぞれに表出する働きを持つ（「に」は着点、「を」は起点または中間経路）。そのため、「走る」「泳ぐ」などの「過程」タイプの移動様態動詞が、例えば着点を表す「に」格と結びつくためには、該当する経路の概念（着点）を語彙化した「着く」「行く」のような動詞表現と組み合わせられなければならない。

#### 参考文献

- McIntyre, Andrew (2006): The interpretation of German datives and English *have*. In: Daniel Hole, André Meinunger and Werner Abraham. (eds.) *Datives and Other Cases: Between Argument Structure and Event Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp.185–212.
- 宮島達夫 (1984):「日本語とヨーロッパ語の移動動詞」国語学会編『金田一春彦博士古希記念論文集 第2巻 言語学編』三省堂, pp. 456–486.
- 松本曜 (1997): 「空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』研究社出版, pp. 126–229.
- Schäfer, Florian (2008): *The Syntax of (Anti-)Causatives: External Arguments in Change-of-State Contexts*. Amsterdam: John Benjamins.
- 高橋美穂 (2015): 「事象の「所有」に基づく lassen および自由与格による項の拡張—ドイツ語の移動動詞を例に一」博士論文 (東京外国語大学).
- Talmy, Leonard (1991): Path to realization: A typology of event conflation. In: *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. Berkeley: University of California, pp.480–519.
- Talmy, Leonard (2000): *Toward a Cognitive Semantics, vol. 2, Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge, Mass.: MIT Press.